第４回「大分ユーモアまんが大賞」最終審査会

日時：平成26年１月11日(土)　午後３時00分より
会場：別府大学 別府キャンパス　４号館４階　ＰＣ４教室

【審査員コメント】

○友永　植（別府大学文学部長）

世の中に「３号雑誌」という言葉がありますが、この「大分ユーモアまんが大賞」が第４回を迎えたことは、大変喜ばしいことです。全国からの応募者の皆さん、そして審査員の皆さんに感謝いたします。《常連》と呼べるような応募者の方も見られ、この賞が安定した社会的評価を受けつつあることが実感できます。今年は特に四コマ作品が充実し、ストーリー性があったりスタイルもバラエティに富んでいました。一コマ部門でうれしかったことは、いくつかの高等学校のパソコンの授業で応募作品の制作に取り組んでいただけたことです。毎年の審査会で審査員の先生方の、時に鋭い、時に幅広い…多様なマンガの見方に接することができるのも、楽しみの一つです。今後も良質なユーモアまんがを大分県から発信し続けたいものです。

○吉田　寛（ユーモアコピーライター）

不景気な時代には《お笑い》が盛り上がると言いますが、昨今のテレビ番組には一向に笑いを誘われません。その点、このまんが賞の審査は毎回楽しませてもらえます。今回は、四コマ・ストーリー部門の笑いの質が高まりましたね。ブラックあり、ほのぼのあり…切り口の幅が実に広がりました。一コマ部門は、伝統的な諷刺作品やご高齢の方々の人生経験が滲んだ作品が多く、もう少し若く新しい感性も欲しかったでしょうか。いずれにしても、まんがのテーマはヒューマン＝人間性。それを絵と簡潔な台詞で表現するまんがは日本の素晴らしい《文化》だと改めて認識させてもらいました。

○岩豪友樹子（歌舞伎・舞台脚本家）

四コマ・ストーリー部門の一次審査通過作品が例年に比べてとても多く、もう読むのが大変でした。質も高かったですし…。物に精神が宿るというような、スピリチュアルな傾向の作品が多く見られたのが、今年の特徴ですね。一コマ部門はちょっと低調だったでしょうか。賞の選考は本当に迷いました。本気で描かれた作品ばかりでしたから。審査するこちら側の価値観や資質を問われているような緊張感やしんどさを覚えました。審査に熱中し過ぎて、今も頭がクラクラしています。「大分ユーモアまんが大賞」はどこまで凄くなっていくんでしょう。ワクワク…というより、ちょっと怖い気がします。

○ジ・アッチィー（「大分プロレス」代表）

このまんが賞の趣旨をしっかり意識して描かれたと想像される作品が並び、充実しているなぁと感じました。絵のタッチ、アイデアの落とし方とも、プロ・アマ問わずハイクオリティで、正直採点しずらかったです。審査員泣かせですね。（笑）四コマ・ストーリー部門は同じ視線で理解できますが、一コマは先輩年齢の方々の作品が多く、発想に感心させられる部分があって、勉強になります。人生の意味を教えていただいています。まんがはエンターテインメントですが、幅広いユーモアのくくりの中で、笑いながら多くのことを学べる「大切な文化」だと思います。次回もさらなるレベルアップに期待です。

○甲元　隆則（別府大学講師 アニメーション担当）

私は今回初めて審査員を経験させていただきました。一次審査にも関わらせていただきましたが、すごい原稿の量で圧倒されてしまいました。私は甲元ですが、甲乙付けがたく困りました。（笑）でも、審査しながら、思わずゲラゲラと笑ってしまう場面があり、「ああ、これがまんがのパワーか！」と改めて認識。一コマ部門はご年配の作家さんが多かったですが、「やはり経験を積み重ねておられるなぁ」と感心させられました。来年は自分も勉強し、鑑賞眼を高めて審査に臨みたいと思います。

○田代しんたろう（別府大学教授 マンガ担当）

今回は四コマ・ストーリー部門が大充実でした。一次審査で絞り切れず、例年より多い 19 作品を最終審査に残すことになりました。それも、すべての作品に個性が光り…「こんないろいろなまんがをただで観られて役得だなぁ」の思いでした。商業漫画誌は、それぞれの《売れ線》に従って掲載作品が決められます。本まんが賞には、そういう商業漫画誌基準には適合しない…「でも、笑える！」作品が寄せられているように思います。我田引水かもしれませんが、地方のまんが賞としてとても健全なあり方ではないでしょうか。ひとえに原稿をお寄せくださる皆様のおかげです！感謝の気持ちを強く持ちました。